

# 異世界冷蔵庫

★  
登場人物  
紹介

★ クピ ★

希少な魔法動物。詳しい能力は、  
未だ解明されていないらしい。

★ 香澄の両親 ★

仕事のため海外在住だが、  
離れて暮らす香澄を  
いつも気にかけている。

★ ミニア ★

異世界の戦場で知り合った女性。  
一見、面倒見がよさそうだが……

★ ルピナ ★

★ トーニ ★

宮廷魔術師長を務めるエルフ。  
赤い魔法動物、ルピナの  
主人でもある。

★ ライル ★

センドリア王国の凄腕の騎士。  
自室のクローゼットが、  
香澄の冷蔵庫とつながる。

★ アンジェリカ ★

センドリア王国のトップに立つ、  
若き女王。

★ 西村香澄 ★

17歳の女子高生。  
自宅冷蔵庫が異世界につながった  
ことで、ライルと知り合う。

## プロローグ

ここ最近のわたしは、不安と恐怖に苛まれていた。

見えない誰かがすぐそばにいるような——そんな薄気味悪さに、常につきまとわれていたのだ。

——だが、今はどうだ。

「ふ、ふふ……」

口から笑いがこぼれる。楽しくて笑っているわけじゃない。この一週間、そんなものとは無縁の生活だったのだから。

「ふふふ、ふふふふ……」

笑いながら、ふるふると拳が震える。

——そう、これは。怒り、だ。

わたしのなかで、燃え盛るマグマのような熱い怒りが生み出されていた。目の前には、開け放たれた冷蔵庫。

そのなかには、普通に食材や調味料が入っている。

しかし目の前のそこには、あるべきものが、ないのだ。

わたしが宝物のように扱って、冷蔵庫の真ん中に置いていた大切なもの。それが、ない。

「ふ、ふふ……」

また、笑いがもれる。その一方で、喪失感から涙が頬を伝った。

このときのわたしは、きつと精神状態がおかしかったのだろう。

わたしは、こみ上げてきた衝動のまま天井に向かって、拳を振り上げた。

「わたしのプリン、返せー!!」

わたしの怒りの声が、家に響き渡る。

この怒りがわたしを突き動かし、そして、運命の扉を開くことになるのだった――

1

わたしの名前は西村香澄。高校二年生の十七歳で、現在は一軒家で一人暮らし中である。

両親は、一年前から海外にいる。父親が仕事で海外赴任となり、父親ラブの母親がついていったのだ。

けれどわたしは一人、日本に残った。

せっかく第一志望の高校に受かり、新たな友達もできたばかりのそのタイミングで日本を離れるなんて、考えられなかったのだ。

なので、一人暮らしをしたいと主張した。朝から晩まで、両親に対してしつこいぐらい粘った。

そのおかげか、はたまた近所に母親の妹一家が住んでいたのが一因なのか、結局のところわたしは、日本に残ることを許されたのである。

ラブラブな様子で飛行機に乗った両親を空港で見送ってから、一年。

わたしの一人暮らし生活は、順風満帆のはず……だった。

そう、過去形だ。

「……また、ない」

冷蔵庫を開け、わたしは口元を引きつらせる。

夏だというのに肌寒いのは、冷蔵庫を開けたせいだけではないのだろう。

冷蔵庫を閉め、恐る恐る辺りを見渡す。

「だ、誰か、いるの……?」

現在、我が家にはわたししかいないはず。現に、家はシンと静まり返っている。

ぞくりと、背中が冷たくなった。

「えー……、ちよつと、本当に勘弁してよー……」

思わず声が恐怖で震える。さする腕には、鳥肌が立っていた。

わたしは震える足を叱咤して居間まで歩き、ソファアに腰かける。そしてクッションを抱えて、

怖いという思いをやり過ごした。

——冷蔵庫から、物が消える。

現在のわたしが直面している問題がそれだった。

三日前から、冷蔵庫のなかに入れていた物がちよこちよこ消えるようになったのだ。

わたしはパソコンの家計簿ソフトを使い、お金についてのみならず、冷蔵庫の中身もしっかり管理している。

一週間刻みできつちり献立を考え買い物しているため、冷蔵庫の中身はバッチリ把握していた……のは、先に述べたようにもはや過去形。

三日前の朝、パンに塗るバターを取り出すべく冷蔵庫を開けたら、バターがなかった。箱ごと、消えていたのだ。

まさかうっかり冷蔵庫の外に放置してしまったのかと慌てて探したけど、家のどこにもバターはなかった。

それが始まりで、次の日には缶詰が、そして今日はケチャップがなくなっていた。

「もう……何なの?」

まさか、ストーカーなのだろうか。このわたしに? それも、冷蔵庫だけを狙って?

そんなストーカー、いるのだろうか。

因みに、我が家の合鍵をもっている叔母さんには最初の時点でそれとなく確認している。しかし、叔母さんは知らないと言っていた。

ならば、どういうことなのか……

「まさか、誰かがうちに住み着いて、る、とか」

言ったそばから、全身を寒気が襲った。

いやいや、いやいや。ないない、ないよ。それはない。

……ない、よね?

「うわっ! 想像したら、怖いっ!」

クッションをぎゅうぎゅうと抱きしめる。

……どうしよう。

何かした方が良いのかな。

叔母さんに相談……は、ダメだ。すぐさま両親に話がいき、わたしは強制的に海外へ連れていか

れてしまいうだろう。それは嫌。なんてったって、日本ラブ。それに、海外で暮らす根性はない。

だったら、監視カメラとか……？

「いやいやいや、もったいない！」

両親から生活費をもらっている身としては、無駄な出費は抑えねば！

……いや、無駄じゃないのかも、だけど。

でも、でもなー……その出費は痛い。監視カメラがいくらするのかは知らないけど、絶対高いだろう。

「……どうしたら、いいのさ」

クッションに顔を埋めて、わたしは呻いた。

「冷蔵庫のストーカー、かぁ。大丈夫なの、香澄？」

「千尋」

学校の教室で、わたしは話を聞いてくれていた友達の千尋に抱きついた。千尋は眼鏡をかけた知的美人さんだ。高校に入っただの友達第一号でもある。

「香澄ちゃん、大変だったね」

友達第二号である彩音ちゃんが、よしよしとわたしの頭を撫でてくれる。彩音ちゃんはゆるふわ天然パーマの、癒し系。

「警察とか、あとはほら、近所に住んでるっていう叔母さんには相談したの？」

千尋の言葉に、わたしは首を横に振る。

「警察に言っても、冷蔵庫の中身が減っただけだと相手にされない気がして……。叔母さんに言ったら、速攻親にバレる！ そしたら、強制的に日本からさよならになっちゃうー！」

「香澄ちゃんのお父さんとお母さん、心配しちゃうもんね」

彩音ちゃんにわたしは頷き返した。

「でもさ、香澄に危害が加えられる前に何とかしないと」

「ストーカーって、本当に怖いみたいだし……」

「そう、だね」

心配してくれる二人に感謝しつつ、わたしはどうすべきか思索した。

それからさらに二日。特にこれといった解決策を思いつかないまま恐怖と戦っていたわたしを、お隣の田中さんの奥さんが訪ねてきた。夕飯も終わり、そろそろお風呂に入るか、というころだった。

「香澄ちゃん、一人暮らし頑張ってるから、私からのご褒美！」

そう言って渡されたのは、何と有名な高級菓子店、シュガーシュガーストロベリーの、プリンだったのだ！

一個千円を超える、お高いプリン様だ。

「いい、良いんですか！」

「うん、良いのよー。自分へのご褒美ほうびにしてちょうだい」

「は、はい！ ありがとうございます！」

わたしは深く頭を下げて、田中さんの奥さんを見送った。

そして、家のなかに入るとプリンを高く掲げてくるくと回る。

「うわーい！ 田中さん、ありがとうー！」

シュガーシュガーストロベリーのプリン！ 高すぎて手が出せず、今までずっとお店の前を通り過ぎる度に悲しい思いを噛みしめていた。

そのプリン様が、わたしの手のなかに！

「やっほーい！」

浮かれたわたしは、すぐさま冷蔵庫の真ん中に、プリン様を置いた。

明日、学校が終わったら、大切にひと口ひと口味わおう。

あー！ 楽しみだー！

わたしはスキップしながら台所を後にした。

——そう。このときのわたしは、今この冷蔵庫に起きている異変をすっかり忘れていたのだ。

明日、プリンを食す。

それしか、頭になかったのである。

翌日、帰宅したわたしを待っていたのは——絶望だった。

「……ない、ない、ない、ない！」

何度も冷蔵庫のなかを見回す。しかし、何回確認しても、そこにプリン様の姿を発見することはできなかった。

「は、はは……っ」

乾いた笑いとともに、台所の床に座り込む。プリン様が、ない。

——いや、なくなつたのではない。奪われたのだ！ 冷蔵庫の、ストローカーに！

その事実は、絶望のなかにいたわたしに、怒りの炎をつけた。

「わたしのプリン、返せー!!」

天井に向けて叫んだのを皮切りに、散々わめいた。そしてふらふらと立ち上がる。今のわたしに、冷蔵庫ストローカーへの恐怖は、ない。あるのは、燃えたぎる怒りのみだ。

ずしんずしんと地響きを起こすかのように床を踏みしめ、ノートパソコンの置かれている居間を目指す。

無言でテーブルの上のノートパソコンを立ち上げたわたしは、高速で手を動かした。開くのは、近所にある家電量販店のホームページ。

そこに「家庭用監視カメラ」と打ち込むと、ずらりと商品の画像が並んだ。

「高い！ しかし、買う！」

即決だ。

「生活費は大切に」をスローガンに掲げている節約家たるわたしを黙らせるほどの怒り。

わたしは、戦うと決めたのだ。  
奪われたプリン様は、もう帰ってはこない。ならば、犯人を特定し、確固たる証拠を掴み警察に突き出して、仇を取るのである。

「撮った画像をパソコンで再生！ これに決めたー！」  
叫ぶとわたしは立ち上がり、財布を手に家電量販店へと向かった。  
待つてろよ！ 暫定ストーカー！

「……どうということ？」

監視カメラを設置してから二日。学校から帰宅したわたしは、パソコンの前で困惑していた。  
先日購入した監視カメラは、人に反応して録画するタイプだ。

そして、この二日間。冷蔵庫の中身は減っていた。だから、録画した映像のなかに犯人が映っているはず、だったのに。

「……わたしの姿しか、映ってないじゃん」

そう、監視カメラはちゃんと録画していた。でも、映っているのはわたしだけなのだ。

他には誰も映っていない。

「……やだ、ますます不気味だよ」

パソコンの電源を切り、鳥肌の立った腕をさすりながら台所に向かう。

今晚の献立を書いたボードのかかった冷蔵庫の前に立ち、勇気を出して、冷蔵庫を開けた。

「……卵が一個、ない」

天井を見る。監視カメラは、わたしに反応してか赤いランプを灯している。監視カメラは正常だ。  
なのに、さつきの再生でも卵を奪った犯人は映っていないかった。

「えー……、夏だからって、ホラーとかホントかんべんしてよー」

冷蔵庫を開け放したまま、強く腕をこすった。

幽霊とかのオカルトは苦手なのだ。心霊番組とか、絶対観れないし。

いや、待て。

幽霊は、物を食べないよね？

つまり、冷蔵庫の中身が減っているのは幽霊が原因ではない、はず。うん、きっとそうだ。そうだよ。

「——なら、誰の仕業？」

そう、やはりそこに行きつくのだ。

誰かが冷蔵庫から食材を持ち出しているのは確かなのに、記録には残らない。  
完全に手詰まりだ。どうしたらいいのだろうか。

「……まさか、冷蔵庫のなかに人が？」

いやいや、それはないだろう。冷蔵庫に妖精さんがいるとか、そんなのないよ、ない。

オカルトじゃなくファンタジーなんて、そんなこと。なんて思いつつも、あまりの不可解さに、  
わたしが完全に妖精さん疑惑を否定しきれずにいたときだった。カタン、と音がしたのは。



音は、冷蔵庫のなかからした。  
反射的に、冷蔵庫を覗き込む。

「あ……」

「え……」

何故か声（なご）がハモる。ハモった相手の声は、よく通る男性のものだった。

——そう、男性。

なんと冷蔵庫の奥の壁が消えていて、そこにぽっかりと空間が空いていたのだ。

向こう側から覗く、透き通った碧眼（ひろめ）をもつ男性。風呂上がりなのか濡れた金色の長い髪を、肩から流している。ついでに色気も満載だ。男性だけど。

そう、美形男性だ。物凄い美形が、食材を挟んで私を見ている。

「だ、誰……?」

「あ、貴女こそ、どなたでしょう……?」

疑問に、疑問で返されてしまった。

それからしばらくの間、わたしたちは無言で見つめ合った。

あまりの異常な事態に、思考がフリーズしてしまったのだ。でも、もしかしたら理由はそれだけではなかったのかもしれない。わたしは、冷蔵庫の奥から顔を覗かせている男性の美しさに見惚（みと）れてしまったのだ。——悔しいことに。

「あ、貴方……どろぼ——」

ようやく頭が回り始め、思わず叫ぶ——というところで、男性が大声を出した。

「神……、ああつ、我が神よっ!」

「……は?」

か、神……?」

男性は何か眩（まよ）しいものを見るかのように、碧眼（ひろめ）を潤（うる）ませた。

「この叡智（えいち）の結晶（けつしょう）を思わせる箱の向こうにいらっしやる貴女様は、神なのですね!」

「え、あの……?」

この美形泥棒は、何を言ってるの?

あっ! 手にもってるの、うちの卵だ! 近所のスーパーのシールついてるもん!

「貴方つ、その卵……」

「おおつ、神よ、神よ! ……我がセンドリア王国に、陛下に慈悲を!」

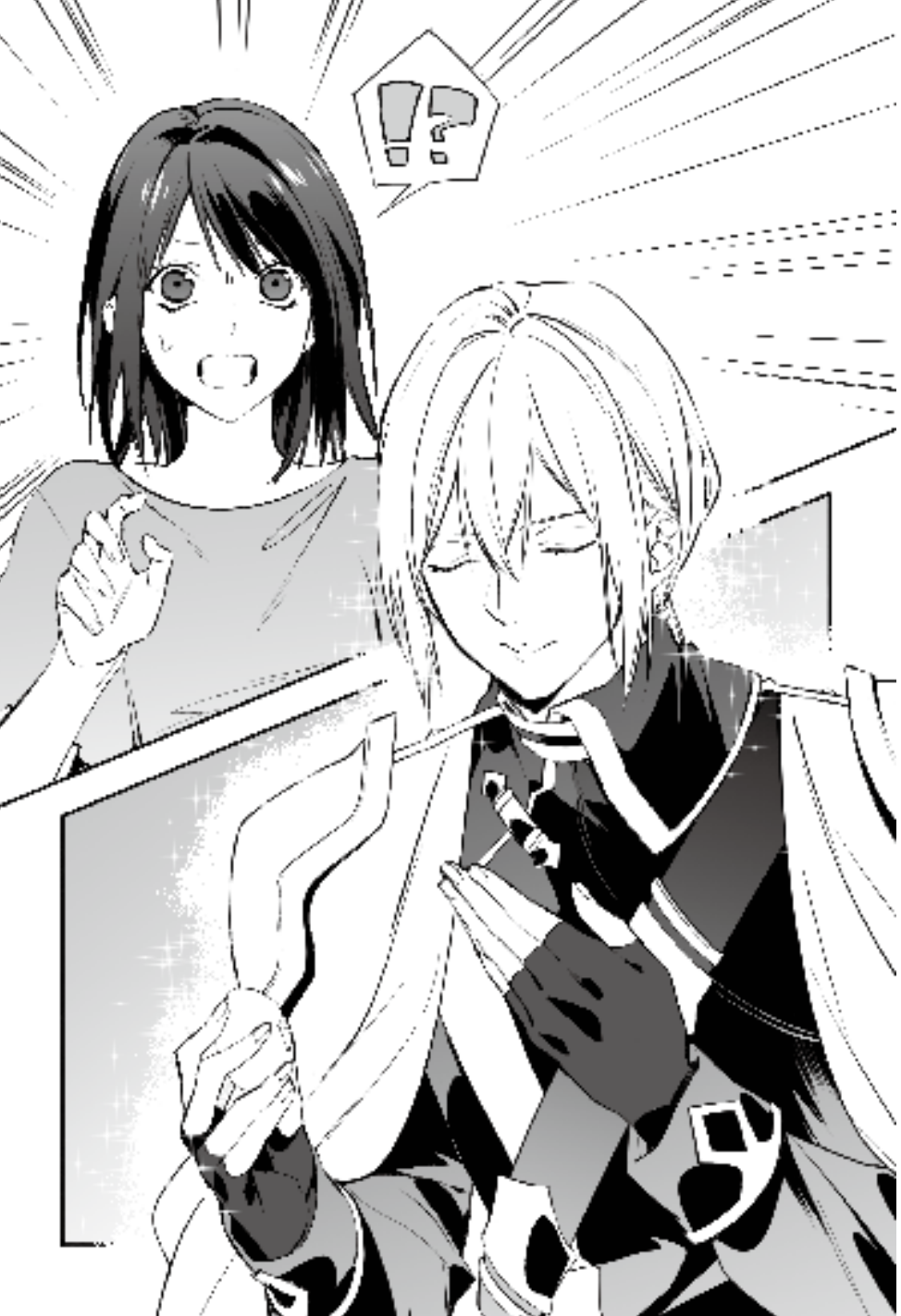
「は、セ、センド……? 陛下? 何を、言ってる……」

突然テンションの上がった男性に、わたしは目を白黒させるばかりだ。

「あの、卵……」

「情けないですが、私は陛下に振り回されてばかりで……。真に陛下のお力になれているとは言い難（がた）く!」

えっと、王政の国なのかな。センドなんとかって。そんな国、あったっけ……?」



「あのっ、貴方……」

「名も知らぬ神よ、我らが崇める主神エルフィントスは、我が国をどのようにお考えなのでしょう」

「エ、エル……？」

また知らない名前が出た！

「我らは主神のお考えを守り、日々魔法の研究に費やし、主神から頂いたお力を高めています」

「ま、魔法!?」

「はい。魔術師たちは日々を魔法の研究に費やし、主神から頂いたお力を高めています」

ど、どうしよう。言っている意味が、全然わからない！

「あ、あのっ、貴方。わたしの話を……」

「神よ。我が祈りを捧げます」

金髪の男性は、わたしの話をまったく聞いてくれない。

そして何を思っつか、卵をもっていない左手を胸に当てると、目を瞑ってしまう。

「――神々よ、長き御代を天空神殿にて見守ってくださいることを、深くお礼申し上げます」

金髪の男性が厳かな様子でそう言うと、男性の体が淡く光り始めた。

「主神エルフィントス。そして我が目の前におられる名も知らぬ神よ。我らに慈悲を賜りたい。我が

国に、陛下に、栄光あれ」

言い終わると、金髪の男性を包んでいた光は粒子となり、天へと昇っていった。

「……イリユージョン？ 手品？ 何なの？」

消えていく光の粒子を呆然と見送り、わたしは混乱のままそう口にした。

金髪の男性が、不思議そうにわたしを見る。

「神よ、いかがなされたのです？ もしや、私の祈りに不備が……」

「今の、何!？」

わたしは冷蔵庫のなかに身を乗り出した。

「は……？ 何、とは……？」

「だから、今光ったやつ！ あれ何!？」

人間が光るなんて、初めて見た！ この人、おかしいよ！

きつと何か、からくりがあるはず。そ、そうでなきや、何なのさ！

「今のは、私の祈りにマナが反応したのです。神々に祈りが届いた証ですが……」

「神々!? マナ!？」

「え、ええ。おわかり頂けたでしょうか？ マナが届けた私の祈りを」

「わからないよ！ わたし、神様じゃないし!」

わたしの叫びに、金髪の男性は目を見開いた。

「神では、ない?」

「そうだよ！ ねえ、今の光、手品なんでしょう？ 何か仕掛けがあるんでしょう?」

縦るように言えば、金髪の男性はとんでもないと頭を横に振った。

「神をたばかるなど、許されません！ 私の祈りは本物です。——てじな、とは何なのです?」

逆に問いかけられ、わたしの混乱は増すばかりだ。

「手品は、仕掛けがしてあるえつと……遊び……つていうか遊戯だよ！ 物が消えたり、人が消えたりするやつ!」

「それは、魔法の領域です。今の私のは、純粹なる祈りで、魔法ではありません。神々から頂いた

力に仕掛けをして、人をたばかるなどするはずがありません」

金髪の男性の真つ直ぐな目に、わたしはたじろぐ。

「じゃ、じゃあ。魔法があること自体が、嘘なんでしょう?」

わたしのキャパは、完全にオーバーしている。

金髪の男性は、訝しげにわたしを見た。

「本当に神では、ないのでですか？ 私をお試しになっているのではなく?」

「違うってば！ 本当にわたしは神様じゃないもの!」

力いっばい否定すると、金髪の男性は窺うように口を開く。

「……見てみますか?」

「え……?」

「魔法を、です。私は陛下の剣。近衛騎士です。近衛は剣の腕だけではなく、魔法の素質があるこ

とも必須ですから」

「……?」

「え……?」

「魔法を、です。私は陛下の剣。近衛騎士です。近衛は剣の腕だけではなく、魔法の素質があるこ

とも必須ですから」

「……?」

騎士……?」

この人、職業は騎士なの？ 完全にファンタジーじゃん。

金髪の男性は、左手を胸から離すと私に見せるように開いた。

「神より授かりし、叡智の光よ。今、顕現せよ」

金髪の男性が呪文のようなものを唱えると、その手に再び光が集まり、そして明かりのような光が灯った。

わたしは驚きから、何も言葉が出てこない。そして、本能的な部分で悟る。

——ああ、これ、手品じゃないや。

金髪の男性が起こしたのは——奇跡だ。

「簡単な魔法ですが、夜に重宝するのですよ」

そう微笑みかけられ、わたしは両膝を床についた。

「は、はは……」

乾いた笑いしか、出てこない。

金髪の男性の灯した光には、確かな「意思」が込められていた。意思のある力——魔法。それを目の当たりにして、わたしの必死の抵抗は降参という形で終わりを告げた。

もう、認めよう。

目の前の男性は、魔法が使えて、騎士様で……ファンタジー世界の住人なのだ。

「……もしかして、こつちとそつちで世界が違う、とか？」

目の前にいるこの金髪の男性に、地球とか日本とか、はたまた電気とか科学とかの話をして、

きつと通じないだろう。だって、魔法が実在する世界の住人なんだから。

「あの……?」

金髪の男性が困ったように笑いかけてくる。

優しさに満ちた笑みに、男性の人間性を見た気がする。——泥棒だけだ。

まあ、異なる世界の住人相手じゃ、警察に言っても意味がないよね。

というか、冷蔵庫の奥の壁が開いた時点で色々おかしかったのだ。

「……あの、本当に神ではない、のですね。であれば——お嬢さん。この状況は、一体何なのでしよう?」

不思議そうな顔をする金髪の男性に、わたしたちの世界は別次元にあるのだと、どうやって説明すべきなのか。

いつの間にか、わたしはこの異常事態を受け入れていた。

「わたし、西村香澄。香澄が名前だよ」

何とか金髪の男性に、今がいかにも異常なのかと説明を終えたわたしは、食材泥棒改めファンタジー世界の騎士さんに、精神的な疲れを隠しながら名乗った。

「カスミさん、ですね。私は、ライル・イグゼノスです。ライルでいいですよ」

「……じゃあ、わたしも香澄でいいよ」

そう言えば、ライルさん……ライルはにつこりと微笑んだ。

「ええ、カスミ」

美形なライルの笑顔が眩しくて、わたしはちよつと恥ずかしくなる。それをごまかすように、早口で尋ねた。

「ライルは、なんで食材をもつていったの？」

「う……!!」

ライルは小さく呻いた。うん、罪悪感はあるようだ。彼は不自然に視線を逸らすと、気まずげに口を開いた。

「ち、知的欲求には、勝てなかったと言いますか……」

「つまり、好奇心で冷蔵庫から食材を盗んだんだね」

「ぬす……、いえ、はい」

ライルって、見た目に反して食いしん坊なのだろうか。わたしがもしライルの立場なら、不可思議な現象を前にして、きつと凄く混乱するだろう。そして、いくら目の前に現れたとはいえ、見知らぬ物体を食べようなんて思わないと思うんだけど……

「友人に解析してもらい、安全性を確かめてから……食べました」

「そう……」

どうやら、警戒心はそれなりにあるみたいだ。

冷蔵庫の向こうで、ライルが頭を下げた。

「他人様の物を盗むなど、騎士として恥ずべきこと。カスミ、本当にすみませんでした」

謝罪するライルは、悲壮感に溢れている。反省の色は濃いようだ。

騎士だと言っていたから、責任感とかもありそうだし……あんまり責めすぎると、思いつめてしまいかもしれない。そこまで追いつめる気はないし——

うーん、仕方ない!

「今回は、新たな隣人に差し入れてた、つてことにするよ」

「カスミ……!!」

顔を上げたライルが、信じられないといった風に両目を見開いた。

自分でも甘いとは思うけど、ライルは充分反省しているようだし、取ったものも安いものばかりだし……ん、安い?

「あー!!」

「カ、カスミ? やはり、私のしたことを怒って……」

「いや、違う! あれ? 違わなくはないけどっ、もう許すって言ったし! ただ、大事なことを思い出したのっ! 重要なこと!」

「重要なこと……」

わたしは、ライルをびしりと指差した。

「プリン!」

「ぷりん、ですか?」

「そう! ライルが二日前に、冷蔵庫から取ったはずのプリン! ……美味しかった?」

そう、シュガーシュガーストロベリーのプリン様を忘れていた。彼の存在が、わたしを突き動かしたというのに！

ライルは困ったように首を傾げた。

「二日前と言いますと——あつ。透明な容器に入っていた？」

「そう、それ！ 味はどうだった!？」

もう、取ったことは責めるまい。でも、食べられなかったのだから、せめて感想は知りたい。そう思つて聞いたわたしに対し、ライルは気まずげに俯いた。

「……すみません、カスミ」

「なんで、謝るの？」

「いえ、ぶりんなるものを、バターのようなものだと思ひ……」

ライルの口振りから、嫌な予感がした。彼はプリン様を、どうしたのだろう。

ライルは、まるで神様に懺悔をするかのように両手を組み、わたしを見た。嫌な予感、倍増。

「シチューのなかに、投入、しました」

「何たる食への冒瀆!」

しまった、シヨックのあまり変なことを口走つてしまった！

いや、だって、シチューに投入つて。シチューだよ？ プリンの神様がいたら、凄く怒るよ！

「騎士寮で異臭騒ぎになり、そのシチューは、廃棄されました……」

「食べられてすら、なかった……!」

わたしは絶望した。シュガーシュガーストロベリーのプリン様は、悲しい末路を辿つたのだ。虚しくて、涙も出ない。

しばらく身動きできなかつたけれど、なんとかかよろよろと冷蔵庫に手をかけた。

「ライル」

「は、はい……!」

きっと彼には、絶望したわたしが幽鬼のように見えただろう。ライルの世界にそういうのがいるのかは、わからないけれど。

わたしは冷蔵庫のなかに右腕を入れ、手のひらを広げた。

「……とりあえず、卵、返して」

「わ、わかりました」

わたしとライルの、初の異世界交流の顛末はこんな感じだった。

うん、まあ。卵だけでも返ってきて、良かった。

——そう思うことにしよう。

翌日、目覚ましの音で覚醒した。

いつもの朝だ。

布団から出たら顔を洗い、朝食の準備をして、それから新聞に入っているスーパーのチラシを見るのだ。テレビからは、今日は晴れると明るく言うお天気キャスターの声が聞こえてくる。

「お、今日は卵が安い！」

目玉焼きを乗せたトーストをかじりながら、わたしは声を弾ませた。

「今日もバイトはないし、学校から直行かな」

そして牛乳を飲む。うん、特濃は美味しい。

ふと、かじりかけの目玉焼きを見て、わたしは昨夜のことを思い出した。

「……ファンタジーの騎士様、か」

ライル・イグゼノス。卵を取り返したあと、わたしは彼に色々尋ねた。そこから得た情報によると、ライルは二十歳だそうだ。育ちの良さがにじみ出る、物腰の柔らかい人。

「綺麗な人、だったな……」

アイドルや俳優もびつくりな美形さんだ。

「あんな人と、友達になっちゃったんだ」

——友達。そう。何故かわたしたちは、友達になってしまったのだ。そしてこのまま、交流を続けることにした。

異なる世界が繋がったのは神のお導きであり、きっと運命なのでしょう、とライルに綺麗に微笑まれ、友人になりたいという彼の願いを断れなかったのだ。

まあ、わたし自身ファンタジー世界の友達という響きにときめいてしまったということは否定できない。知り合って間もないうえ、出会いはあんなだったけど、でも、ライルは優しい人なんだと話していてわかったから。優しい人は好きだ。

つらつらとそんなことを考えながら、壁にかけられた時計を見る。

「あつ、そろそろ支度しないと！」

わたしは朝食をすませると、学校指定の鞆にスパーのチラシをしまい込んだ。

制服に着替え、施錠もしっかりして家を出る。

電線の向こうに見える空は、新たな友達の色か、何だかいつもよりも輝いて見えた。



運命の扉が開いたのは、今から八日前のことだ。

私、ライル・イグゼノスは女王陛下の剣である。

我がセンドリア王国は大国でこそないが、肥沃な大地を有し、広大な海と面している、資源に恵まれた豊かな国だ。

そんな我が国だが、先代国王が昨年崩御されたことで、落ち着かない状況が続いている。

第一王位継承権をもつアンジェリカ女王が即位されたものの、国内はまだ混乱しており、中枢も盤石ではない。

私は、アンジェリカ女王陛下から、近衛騎士を拜命していた。その日から、陛下の為に少しでもお力になるうと決意していた、のだが……

陛下を守る我が役目は、大変な榮譽であると同時に試練ともなった。

陛下はとにかく、無茶をおっしやる。

「ライルよ、早馬を出せ！ ルーゼル砦を視察するぞ！」

そう命が出たのならば、陛下をお守りする精鋭を集め、そこが辺境の地だろうが即時赴く。

「なに、妾の侍女に無体を働く輩がいるだ？ ライル、すぐさま成敗して参れ！」

そう陛下が義憤に駆られれば、勅命のもと悪徳貴族を捕らえる。そんな貴族連中に、牢屋のなかで延々と説教するのは苦痛だった。

陛下に問いたい。私の剣は、本当に必要なのかと。

「……今日など、深夜まで猫を探し回りましたし」

疲れ切つて騎士寮の自室に戻った私は、壁に背を預けると顔を覆つた。陛下、ご自分の猫の管理ぐらいご自身できちんとしてください。

真つ昼間から夜遅くまで、近衛が揃いも揃つて猫の名を呼びながら地べたを這いずり回るなど、他に示しが見つからない。

陛下の猫は飼い主に似て、たいそう活発であった。華麗に調理場を荒らし、我らの手をかい潜り、城の庭園をめちゃくちゃにしていた。庭師の悲痛な叫びが今も耳に残っている。

てしてしと、泥にまみれた花々を踏みじる猫の顔ときたら——。臣下に無理難題をふっかけるときの陛下にそっくりだった。ああ、胃が痛い……

ふらふらと壁から離れ、私はベッド横の柵に向かった。小さな柵の上には籠が置いてあり、なかには白い毛玉が入っている。

毛玉から聞こえる「ぷすぷすー」という呼吸音。その都度、毛玉は上下に動く。

「ふふ」

毛玉の様子に気が緩み、体から力が抜けた。ああ、毛玉に癒される。

しばらくの間毛玉を見てから、着替えを取るために衣装柵へと向かう。

深夜まで働いた体は汗臭い。自室にある浴室で汗を流し、今日はもう眠ろう。

そして朝を迎えたら、頑張ればいい。

だが、そう思つてはみても、明日にはまた陛下から無茶振りをされるのだろう。あの方は、まったくもつて懲りないのだから……。晴れない気持ちのまま、私は衣装柵の取っ手を掴んだ。が、すぐさまその手を引つ込める。

「取っ手が、冷たい……？」

銀でできた取っ手が、ひんやりと冷気を帯びていたのだ。

今、季節は初夏。取っ手がこれほどまでに冷たくなる理由はない。

不可解に思いはしたが、心身ともに疲弊していた私は今の感覚を気のせいだと思い、再び衣装柵の取っ手を掴んだ。そして、扉を開く。

「えっ……!？」

飛び込んできた光景に、目を見開いた。

衣装柵のなかは、光に溢れていたのだ。しかも、ひんやりと冷気を発している。

私の衣装柵のなかは——明るく冷たい箱へと姿を変えていた。



呆然としたまま、無意識に手を伸ばす。そこに、魔法による罫わななどはないようだ。すんなりと手が入る。

並んだ見知らぬもののなかから、私は固い紙でできた箱を取り出した。

「……この模様は、文字、なんでしょうか？」

ツルツルした紙に、色鮮やかな模様が描かれたその箱に、何だか惹きつけられた。

私は一度扉を閉め、そしてまた開ける。やはり衣装棚のなかは、冷たい箱のままだった。

「……私の服は、どこへ？」

このときの自分は、本当に疲れていたのだ。

それから、数日。衣装棚が冷たい箱になったという異常事態に、私は慣れつつあった。

最初のときに冷たい箱から取り出したものは、魔術師の友人に渡し、解析してもらっていた。

未知なる物体に、何か凄すこい結果が出るのではと身構えていたのだが——

友人はけらけらと笑いながら、こう言ったのだ。

「これ、食いもん！ しかも、けっこう上等な品っぽいぜ」

開封された四角い箱の中身は、このバターだと言う。

若干拍子抜けしつつも、私はそれをパンにつけてみた。そして、口に入れる。危険なものならば解析をしてくれた友人が止めてくれるはずだから、止めなかったのなら、食べてもいいということだと解釈したのだ。

「……こ、これは」

固いパンの前に、私は呻うなく。まずかったからではない。

美味おいしかったのだ。とてつもなく。

いつも食べている味気ないパンが、バターを塗っただけで、まるで王族が食べる上等なもののようになった。

「凄すこいですね、これは……」

バターの入った不思議な材質の容器を見ながら、私はため息をついた。

このとき私は、この冷たい箱が神の業わざによるものなのかもしれないと思ったのだ。

「ぶきゅる、ぶきゅー！」

同じテーブルの上で果実をかじっていた毛玉が、私のそばに寄ってきた。

「クピも食べたいのですか？」

「きゅー！」

毛玉——クピは、体を震わせた。

クピは魔法動物で、とても希少な存在である。真っ白でふわふわの体に、つぶらな目。細い手足と、小さな羽根がある。

友人から譲り受けたこの生き物は世話が楽なので、忙しい私でも飼うことが可能だ。

バターをスプーンで掬すくり、クピに差し出す。クピはすぐさまスプーンに飛びついた。そして、ペロペロと必死な様子で舐める。どうやらクピも気に入ったようだ。

「美味しいですか？」

「ふぎゅっ」

ぶるぶると体を震わすクピ。これは肯定だ。

クピの話す言葉はわからないが、態度で、だいたいの意思の疎通は可能だ。そして、私の話す言葉を、クピは完全に理解している。

「それは良かったです」

「ふぎゆる、ふぎゆる！」

クピは飛び跳ねて、お代わりを催促する。とても気に入ったらしい。決して、私が普段良いものを食べさせていないわけではない。断じてない。

こうして、クピと私は、心ゆくまでバターを堪能したのだった。

それからの私は、多少の後ろめたさを感じながらも、冷たい箱からものを取り出すことを止められずにいた。

冷たい箱の中身は、美味しい食材で溢れていたからだ。

丸くて固い箱のなかには、冷たい果物が入っていた。柔らかく動く透明の容器に入った赤色のソースは、玉子料理に良く合った。

そう。私は冷たい箱を満喫していたといっても良い状態だったのだ。

冷たい箱と邂逅して、八日目。私は、卵を片手に衣装棚の扉を見ていた。

この卵は今、冷たい箱から取り出したものだ。これもきつと、美味しいのだろう。

一度扉を閉めて、衣装棚を見つめる。

この箱はまさしく、神から与えられたものなのだろう。もしかしたら、陛下に日々翻弄されている私への、少しのねぎらいなのでは——。私はそう思うようになっていた。

「……ただ、二日前のものは失敗でしたね」

冷たい箱の真ん中に置かれていた、透明な容器に入ったクリーム。

てつきりバターの仲間だと思ひシチューに入れたら、大変なことになった。

シチューが甘すぎる異臭を放ちはじめたのだ。おかげで騎士寮は大騒ぎだった。クピまで部屋の隅で怯える始末。

「……気をつけなくては」

あのとぎの騒ぎを思い出し、私は深々とため息をついた。そして卵を手のなかで弄りながら、再び衣装棚に手をかけた。他に良い食材がないかと思いつつ。

だが——

「だ、誰……？」

冷たい箱の向こうにいたのは、艶やかな夜を思わせる髪に、漆黒の無垢な目をもつ少女だった。

「ライール！ 起きてるかー！」

冷たい箱を介して新たな友人を得、明けた朝。何だか気持ちがふわふわする。思わず笑みを浮かべていると、自室の外からのんびりとした声がした。

トーニだ。トーニは長命であるエルフ族の青年で、外見は私と同じくらいに見えるが、実際の年齢はもう本人にもわからないらしい。宮廷魔術師長という陛下に信頼される凄（むご）い立場にしながら、私に何故か気安く接してくれる。いつしか私も彼を頼るようになっていて、今ではすっかり仲の良い友人として付き合っている。そんな得難（えがた）い友人のだが、仕事はどうしたのだろうか。因（ちな）みに私は、本日は休みだ。

「起きてますよ。入ってください」

「おーはよー！」

トーニは片手を上げながら入室してきた。

長くて綺麗な銀髪は、所々はねてぼさぼさだ。トーニは、自身の身だしなみを気にしない。エルフならではの恐ろしいほどの美貌でありながら、外見には非常に無頓着（むとんちゃく）だ。頭にはクピと同種の魔法動物である赤い毛玉を乗せている。

実はクピは、このトーニから譲り受けたのだ。トーニは仕事柄、たくさん魔法動物と触れ合っている。そのなかの一匹が、クピだった。当のクピはというと、籠（かご）のなかでのんきに眠っている。

トーニは、宮廷魔術師長の証（あかし）である白いローブを着ていた。やはり今は、仕事の時間のようだ。

「研究はどうしたんですか？」

「あー、抜けてきた！」

「……またですか」

トーニは魔法の天才だ。だが、仕事が好きというわけでもない。

どうやら先代国王に大きな借りがあるらしく、即位して間もない女王陛下を心配して、という名目で、センドリア王国に滞在し続けてくれているのだ。本当ならば、一つの国に縛られず、自由気ままに旅に出たいのだと以前こぼしていたことがある。

しかし、トーニは現在の我が国において重要人物。彼を欠いては、国は成り立たない。だからせめて、陛下の御代（みよ）が安定するまではいてほしい——それが、私の思いだ。それに、この自由でありながら深い叡智（えいち）をもつ友人と別れるのが寂しい、という気持ちもある。

頭に乗る毛玉をわしわしと撫（な）でるトーニを見つめた。

「……トーニは、旅に、出たいですか？」

毛玉を手に乗せ椅子に腰かけた彼に、無意識にそんなことを尋ねていた。

一度声にしたものはなかったことにはできない。だけど友人の答えを聞くのが怖く、視線を手元に向けてしまう。

「旅かー。今は、いいよ」

「え……？」

あっさりと言われた言葉に目を瞬（またた）かせ、私はトーニを見た。

彼は、にっと口の端を上げる。

「だってさ、アンジェリカはまだまだ未熟だしさあ。俺（おれ）いないと、大変（たいへん）たる？ それにライルっていう友達が、最近面白いことに巻き込まれたじゃん。当分は飽きないな！」

「トーニ……」

「そんな顔すんなって！ お前らが生きているうちは、この国のために働くから！」  
だから死ぬなよ、とトーニは笑った。

私たち人族より遥かに長生きするエルフの民。私たちは、確実に彼より先に生を終えてしまう。  
それを思うと、胸が痛んだ。

そんな思いが表情に出てしまったのか、トーニは苦笑いを浮かべた。

「だから、辛気くさい顔するなって！ お前らの生は、まだまだ長い！ 俺は、そんな生を大事にするぜ」

「……ええ、そうですね」

トーニの気持ちが嬉しい。素直に彼に同意した私を見ながら、トーニは腕を組み、うんうん頷いている。

「人間は素直で正直なのが一番だな！ うちんとこの魔術師たちにも見習わせたいぜ」

「私は、そんな……」

「いや、ライルは正直者だ。それで、俺が部屋に入ったとき、なんか嬉しそうだったけど。何かあっただろ？」

「そ、それは……」

嬉しいことはあった。

そう。友人が増えたのだ。それも、異なる世界に住む人間だ。

カスミ。

艶やかな黒い髪に、無垢な目をもつ少女。初めて見たとき十四、五歳だと思ったのだが、十七歳だという。

彼女のことを思い出していると、トーニの小さく笑う声が聞こえた。

「やっぱり、良いことあったんだろ。なあなあ、何があった？」

青い目をキラキラと輝かせ、私を見つめるトーニ。完全に好奇心に支配されている。こうなった彼は、私が白状するまで追及の手を緩めないだろう。

「黙秘は……」

「ダメに決まってるだろ。さあさあ、白状しろ！ あの不思議な箱関連なんだろ！ そうに決まっている！」

身を乗り出した友人を見て、私はそっとため息をついた。



ふっふっふ。

スーパ―の特売品売り場で、わたしは勝ち誇っていた。

今日は戦利品がいっぱいだ。あー、カゴが重い！

今日はお味噌汁が食べたい気分だからと、わかめを買ったのだ。なんとタイミンクの良いことに、本日乾燥わかめが大安売り！ 二袋も買ってしまった。

豆腐もお得な値段だった。ツイてる。今日のわたし、ツイてる！  
お安い卵も、もちろんゲットした。気分は最高だ。

「監視カメラで余計な出費しちゃったからね。他で節約しないと！」

まあ、ライルと友達になれたから心情的にはプラスだと思おう。友達が増えるのは、良いことだ。  
うん。

でも家計はしめていかないとな。

「おお、お味噌も安い！ けど、まだ残りあるしなあ」

そんな風にスーパーをうろついて、わたしは買い物で満喫したのだった。

我ながら美味しいお味噌汁を作り出し、主食の親子丼とともに堪能して夕食は終わった。

美味しいご飯は、世界を綺麗に彩るのである。

食後に居間でまったりしていると、携帯電話がメッセージの通知を知らせた。千尋からだ。

『今日の香澄、機嫌良かったみたいだけど。例の件は大丈夫なの？』

しまった！

例の件とは、冷蔵庫のストーカーのことだろう。わたし自身色々あったから、千尋と彩音ちゃんに話すの忘れていた。

『あれ、わたしの勘違いだったみたい。合鍵もっている叔母さんが最近出入りしてたみたいで……。報告遅くなってごめんね！』

そんな風にメッセージを返す。叔母さん、なすりつけたみたいでごめんなさい！

似たような文面を、彩音ちゃんにも送る。

二人からはすぐさま、安心したとメッセージが返ってきた。二人の優しさに、涙腺が緩んでしまふ。

「ありがとう」

そう呟いて、わたしは携帯電話を目の前にあるテーブルに置いた。わたし、友達に恵まれているなあ。

そう実感したあと、軽い緊張状態になる。何故なら……

お風呂は帰宅後すぐに入ったので、今のわたしはほかほかの部屋着姿。しかし、ちょっとだけ気合いを入れた部屋着だ。

「……もうすぐ、八時か」

お笑い番組を映すテレビを見つつ、わたしは壁の時計をちらちらと確認していた。

いや、その——ライルと、約束をしたのだ。

ライルの世界も、一週間は七日で、一日の時間は二十四時間だという。

そこで、わたしの方では夜の八時に、ライルと会話すると約束したのである。

ライルの世界では、闇時間の八の刻というそうだ。呼び方がファンタジーで、テンションが上がったけど、それはライルには秘密だ。

ライルは近衛騎士として、夜間でも仕事をする日があるらしい。勤務日程も、変則的なようだ。

今日は水曜日で、タイミングよくライルは休日だという。相互理解を深めるにはうってつけだ。昨日は混乱のあまり、色々聞き逃しちゃったけど……。一晩を経て、多少は落ち着くことができたわたしはライルの世界に興味が湧いていて、八時になるのを楽しみにしているのだ。

だって、ファンタジー世界だよ？ 漫画や小説やテレビのなかでしか知らない魔法が、本当に存在しちゃうんだよ？

意味もなく番組を変えたり、ソファから立ったり座ったりを繰り返す。わたし、そわそわしすぎた。

「……シャンプー、フローラル系のやつにすれば良かったかな」

今日使ったのは、ライムミントの香りがするやつだ。

……いや、何を考えているんだ。

わたしは、友達とおしゃべりするだけなんだから。その相手が、かなりの美形で紳士な騎士様なだけで……騎士様って、上品な女性と会ったりするよね？

いや、ライルは誰かと比べたりするような人じゃないと思う。

そうだ、そうだ。わたし、平常心だ！

ふと時計を見れば、八時まであと一分になっていた。

「時間だ！」

テレビを消して、台所へと向かう。そして、冷蔵庫の前に立つと、すーはーすーはーと深呼吸をした。

「……よし！」

高鳴る胸とともに気合いを入れて、冷蔵庫を開ける。そして、なかを覗き込み……固まった。

「やっほー」

のんびりとした声とともに、ひらひらと手を振る男性。

………ライルじゃない。

ライルはさらさらの金髪だけど、今向こうにいる男性は、毛先が薄く青みがかった銀髪だ。寝癖なのか、所々はねている。そして頭には、何故か赤い毛玉を乗せていた。

顔立ちが、かなりの美形だ。完全なシンメトリーで配置された宝石のように美しい青い目に、薄いけど形の良い唇。

そんな美形がここに笑って、わたしを見ている。

だけど、いくら愛想良くされても、彼はライルじゃない。

「ど、どど、どちら様ですか……？」

冷蔵庫の扉に身を隠し、顔だけを出して恐る恐る問いかけた。

「あれー？ 警戒されてる？ おーい、ライルー。お嬢さんに怖がられちゃったよー」

銀髪の男性は、後ろを向いてそう叫んだ。え？ 今、ライルって言った？

「あっ、トニー！ 何勝手に開けているんですか！」

「いや、だって。お前、風呂長いんだよ。話に聞いたお嬢さんを待たせたら、悪いと思っさー」

「だからって……」

「そんなに怒るなよ」

ライルの声が聞こえて、緊張で固くなっていた体から力が少し抜ける。ライルの話しぶりからすると、この男性はライルの知り合いのようだ。

銀髪の男性が横に移動して、代わりにライルが現れる。

「ライル……」

わたしはホッと息をはき、冷蔵庫の扉から体を出した。良かった、冷蔵庫が知らない人の部屋と繋がっちゃったのかと思っただよ。

髪を湿らせたライルは、申し訳なさそうに眉を下げている。

「すみません、カスミ。彼は私の友人で、トーニというのですが。貴女の話をしたら、会いたいですっごく……」

「わたしのこと、話したんだ」

ちよつと言葉がきつくなる。

わたしはライルのことを皆には秘密にしているのに、ライルが誰かと秘密を共有してしまったことが何となく嫌だったのだ。

わたしの苛立ちに気づいたのか、ライルは慌てたような口調で言った。

「話したのは、彼にだけです！ ほら、食材の解析を頼んだ宮廷魔術師長が彼なんですよ。だから、彼には話すしかなくて。すみません……」

真摯まじしに謝られては、許すしかない。それに宮廷魔術師長という単語で、わたしはあることを思い

出したのだ。

「宮廷魔術師長って、確かエルフだって……」

そう、エルフだ。ライルが宮廷魔術師長はエルフ族だと言っていた……気がする。

「うん、そう。俺、エルフだよー。ほら、耳尖みみほってるでしょ」

銀髪の男性が、ライルの脇から顔を出した。自分の耳を引っ張ってわたしに見せてくる。

「耳、長い……！」

「うん、エルフだからね。なにに、エルフ初めて見た？ それとも、そっちの世界にエルフはいないの？」

わたしは言葉にならず、ただこくこくと頷くのみだ。

「そっかー、エルフいないのか。……うん、そっちから流れてくる空気にもマナは感じないし、本当に違う世界ってことか」

そこまで言って、銀髪の男性は目を輝かせた。

「あの、えっと。トーニさん」

「トーニでいい。ライルのことも呼び捨てだろ？」

「は、はい！」

「かったいなー。いいよ、いいよ。敬語いらさない。俺、そういうの好きじゃない。まあ、立場上こっちの世界ではわがままは言えないけど、カスミは世界が違うからな」

「う、うん。わかった」

トーニは偉い人なんだろうけど、何だろう、なんか大きっぱな人……エルフだね。  
「さーて、自己紹介もすんだことだし。カスミ」

「はい」

名前を呼ばれたから返事をしたら、トーニは真剣な表情を浮かべてわたしを見ている。  
な、何だろう。

「とりあえずさー」

トーニが話すのと同時に、キュルルルという可愛い音が聞こえた。トーニのお腹から、盛大に。

「……俺ら、腹減ってんだよねー」

「トーニ、私は別に腹など……」

ぐううう。今度はライルのお腹が鳴った。トーニのときよりも、大きい。

ライルは顔を真っ赤にして、わたしから目を逸らした。

「ライル……」

耳まで赤くしたライルは、やはりわたしの方を見ない。

「……今は、私を見ないでください」

消えそうな声で言う彼に、見えないだろうけどわたしは頷いた。

「あははー。俺ら、朝から何も食べてないもんなー」

「えっ、な、なんで」

朝から!? こんな夜まで何も食べてないなんて、それは大変だ。わたしなら、空腹で倒れちゃ

うよ。

ライルはわたしを見ないまま、もごもごと口を動かした。

「トーニが悪いのです。新しい魔法式を思いついたからと、私を付き合わせて……」

渋い声のライルに、トーニがからからと笑う。罪の意識など微塵みじんも感じてなさそうな顔だ。

「なーなー、カスミ。何か食わせてー」

「え……」

「この箱、色んな食べ物入ってたしき。そっちに何か食い物あるんだろー？」

トーニがにこやかに冷蔵庫のなかを覗き込んでくる。

「ちよつと、トーニ！ 勝手に漁あさらないでよね！」

「なら、何かよこせー」

「トーニ……」

ライルが呆れ果てたとばかりにトーニを見ているけど、トーニにこたへた様子はない。彼は強朝きょうしんな精神の持ち主なんだろう。

「……わかったよ。ちよつと待ってて」

諦めたわたしは、冷蔵庫の前からコンロの方へと向かう。

「カ、カスミ。良いのですよ、私たちに気を使わなくとも……」

ぐうううという音が、ライルの遠慮をかき消した。トーニの笑い声が聞こえたことから、ライルのお腹の音なのだろう。



「そんなにお腹を空かせた人を、見捨てられないよ。と言っても、お味噌汁ぐらいしか出せないけど」

そう言いながらコンロに火をつけて、お味噌汁の入った鍋を温める。

その間に食器棚から、二つのお椀を取り出した。

「オミソシルって、なんだろうな！」

「トニー、はしたないですよ」

冷蔵庫の方から、そんな会話が聞こえてくる。

そうか、二人の世界にお味噌汁って料理なのか。まあ、そうだよな。この世界でも日本の料理だし。

くつくつという音がしたので、お椀にすくう。今日の具材は、豆腐とわかめだ。戦利品はきっちりを使うのだ。

トレイにスプーンと二つのお椀を載せて、冷蔵庫を介して二人に渡す。

「はい！ 熱いから気をつけてね」

トレイを見て、二人は目を瞬かせた。

「これが、オミソシル……」

「なんか……」

二人は口をもごもごさせ、何やら呟いている。

「なあ、カスミ」

「なに、トニー」

トニーは眉間にシワを作り、わたしを見てくる。

「これさあ、腐ってない？」

「トニー！」

失礼なことを言つてのけたトニーに、ライルが叱りつけるように言った。

腐ってるって、なんて酷い言いぐさだろうか。

「腐ったものを、人に食べさせるわけじゃないでしょ」

「だって、これ。なんか、茶色いし。匂いがさ……」

「味噌の良い匂いじゃない」

「ミン……?」

ライルまでもが、きよとんとしている。なんてことだ。半ば予想していたとはいえ、ライルたちの世界に、味噌文化がないとは！ 日本人としては由々しき問題だ！

「味噌は美味しいよ。確かに発酵させて作るものだけさ」

「やっぱり、腐ってるんじゃないか！」

「もう！ うるさい！ いいから、飲みなよ！」

恐る恐るといった風にライルがスプーンとお椀をもった。そして、意を決したように口をつける。こくりとお味噌汁を嚙下した瞬間、彼はパッと顔を上げてトニーを見た。

「トニー、美味しいですよ！」

「なに、本当か!？」

「ええ、独特の風味ですが、とても優しい味で。それに体が温まります」

トーニもお椀とスプーンを手にとった。

そして、ライルという先駆者がいたからか、躊躇うことなく味噌汁を飲んだ。

「美味しい!」

「ええ。この四角くて柔らかな具も喉越しが良いですね」

「それは、豆腐って言うんだよ」

「トーフ、不思議な響きです」

「このくにやくにやした具、食感が面白いな!」

「それは、わかめ」

「ワカメか、気に入った!」

ライルは豆腐が気に入り、トーニはわかめを好きになったみたいだ。

二人してキラキラした目で、味噌汁を平らげていく。お代わりが必要だな、これは。

「カスミ、カスミ。もつとくれ!」

「ト、トーニ!」

図々しさ全開のトーニを、ライルはたしなめようとしているようだった。

まあ、わたしは自作のお味噌汁を誉められて気分が良くなったので、お代わりを許す気でいたからいいんだけどね。

「はいはい、お代わりね。ライルもいるでしょ?」

そう聞けばライルは頬を染めて、空のお椀を差し出した。素直でよろしい!

二人に二杯目を渡す。お味噌汁の良い香りが今度はわかるだろう。

そうして、二杯目もお腹に収めた二人は、満足そうに息を吐いた。

「とても美味しかったです、カスミ。ありがとう」

「どういたしまして」

そう言ってライルたちから、お椀とスプーンを受け取ろうとしたときだった。

「ぶきゅるー!」

てのひらサイズの白い何かは、ライルのもつお椀に飛びついた。

「あつ、クピ!」

ライルが名前らしきものを口にするが、白い何かは「ぶきゅつぶきゅつ」と、お椀の底を舐めているみたいだ。止まる気配はない。

「おいおい、クピ。オミソシルはもうないぞ?」

トーニがツンツンとクピと呼んだ白い何かを指で突つついた。すると――

「いつてー! こいつ噛みやがった!」

「きゅつぴー!」

白い何かは、ぶわつと体を膨らませている。お、怒っているのかな?

「ダメですよ、トーニ。何かを食べているときに触れると威嚇行動に出ると言ったのは、貴方です」

しよう?」

「くっ、そうだった……」

噛まれた手をひらひらと振りながら、トーニは悔しそうに言う。

そして、頭から赤い毛玉をはぎとると、てのひらに乗せ、頬擦りをした。

「ルピナー、お前はこんなにもおとなしいのに、クピは狂暴に育ちまったよー。きっと、飼い主がいけないんだな!」

赤い毛玉は、「すぴー、すぴー」と寝息らしき呼吸音を立てて、されるがままで。白い何かは、よく見れば赤いと同じく毛玉のように見える。赤と白は、同じ生き物なのだろうか?

……生き物、なんだよね? 動いているし。

ライルは惘然とした面持ちで、トーニを見ている。

「クピだって、普段は大人しいですよ! いったいどうして……」

困惑するライルの手元のお椀のなかでは、クピと呼ばれた毛玉がうごごしている。

「クピ、オミソシルはもうないですよ。意地汚い真似はやめなさい」

「ふぎゅっ!」

ライルの声に応えたのか、クピは顔らしき場所をお椀から出した。ふわふわの体に、つぶらな目をしている。

「ライル、良かったらお味噌汁もってこようか?」

「え、さすがに三杯目は……」

「ふぎゅきゅー!」

ライルが遠慮したとき、クピがライルの顔面に飛びついた。「ぐあっ!」と呻き、後ろへ倒れ込むライル。倒れた彼の顔の上に、白い毛玉が立ち上がった。枝のような手足が目に入る。

「な、なに……?」

毛玉の目は、わたしに向いている。言い知れぬ恐ろしさから、声が震えた。

クピの体がゆらりと揺れた。そして——なんと、わたし目かけて飛んできたのだ!

「え……!」

「おい、クピ!」

トーニが手を伸ばしたけれど、クピは華麗にかわして冷蔵庫へ飛び込む。一瞬、冷蔵庫の電気がチカチカと点滅した。冷蔵庫の中身がぶれて二重に見える。瞬きをしたら、元に戻ったけれど……何だったのだろう。

いやいや、それよりも! 冷蔵庫のなかに着地したクピがまた跳躍したんですけど! わたしの胸元に一直線なんですけど!

これって、受け止めるべきなの!?

「ふっきゅー!」

「わっ、とと!」

びたん、とわたしの服に張りついたクピを落とさないように、思わず抱きしめる。うわっ、ふわふわ!